

令和8年度 第2回大東市産業振興市民会議（報告）

1. 日時・場所 令和8年8月18日（火）午後3時00分～5時30分

大東市役所 厚生棟A会議室

2. 出欠（敬称略）

【出席】

（株）山田製作所 代表取締役	山田 茂
明星金属工業（株） 取締役	上田 隆章
大阪産業大学 社会連携・研究推進センター長	
情報デザイン学部 情報システム学科 教授	後藤 彰彦
大阪公立大学 商学部 教授	本多 哲夫
新大阪食品産業（株） 代表取締役	北尻 正太
NPO法人大東夢づくりコミュニティ 代表理事	中村 朋子
小金屋食品（株） 代表取締役	吉田 恵美子
大東市商業連合会 副会長 大川創業株式会社 執行役員 部長	松隈 孝一
大東商工会議所 常議員 （株）ウチダ 代表取締役	内田 祥嗣
ブリコリーブ 代表	竹中 雄一
近畿経済産業局 総務企画部中小企業政策調査課長	小谷 和可

大東市 産業・文化部長 田中 知子

事務局 産業経済室 杉谷総括次長・椎葉課長・林課長補佐・嵯峨根（文責）

3. 議題

①会長・副会長の選出

会長には山田委員が就任。（推薦による）

副会長には上田委員が就任。（山田会長からの指名による）

②委員紹介

各委員・事務局から自己紹介と挨拶を行った。

③産業振興市民会議の経緯・4つの基本指針の説明

山田会長および事務局より資料2～資料4について説明。「大東市地域産業振興基本条例の設立の経緯」や、「10年後の大東市の産業振興に関する基本指針」、令和7年度に意見交換を行った田川市の活動内容についての情報共有を行った。

④田川市視察の報告

事務局より資料5～資料6について説明。続いて、田川市視察に参加された北尻委員、内田委員、上田副

会長、山田会長よりそれぞれ報告を行った。

事務局（嵯峨根）：

-田川市について-

田川市につきましては、人口的には4万人くらいの規模の市です。しかしながら、地元の企業が、地域のために頑張っている町おこしが行われている市です。田川市では中小企業振興基本条例は、平成27年に策定をされております。また、田川市では中小企業振興ビジョンを策定され、「地元の中小企業や小規模事業者の自覚と努力」、「田川市民の認識と理解」、「次代を担う若者たちへの、承継継承」という3点がとても重要とされています。1つ目にあります「自覚と努力」というフレーズは大東市の条例にもあります“自助努力”と重なるところがあるかなと思いました。

組織図を見ますと田川地域経済活性化センターを中心に、企業だけではなく、金融機関や市民の方、学校等も関わって、連携してまちづくりを行っておられます。組織としては、一番上に方針を決定する産業振興会議がありまして、その下に、企画立案する実務責任者会議があり、その下に4つの部会があります。第1部会では、「中小企業経営者が経営の基本を学ぶ場の開設」をテーマとして、事業を進められております。主に商工会議所と連携して進めておられるようで、全体としては、経営ビジョンの必要性ということ、事業者の方に周知をされております。第2部会としましては、「地域の課題を解決するソーシャルビジネスの推進」をテーマに活動されておられまして、地域の困りごとについて、その課題を解決する事業を競い合う”GOLDRUSH”という、コンペのような事業を実施されておられます。第3部会では、「生活者と事業者をつなぐプラットフォームの構築」ということで、実際に、令和6年4月に、”KIBITTE(キビット)”という、サイトを開設し、市民の方が困りごとを投げれば、解決できそうな事業者を紹介してくれるマッチングサイト運営をされております。資料では、現在76社登録とありますが、先月、視察の際に聞いた時点では約100社の事業者登録があると聞いております。第4部会としましては、「地域では若者を育て地域に若者を残す活動」ということで、“たがわPlanners”という形で、高校生を中心に、商店街イベントを開催するなどの活動をしておられました。

-田川市視察報告について-

7月28日、29日で行ってまいりました田川市での現地視察について報告します。

1日目は実務責任者会議を傍聴させていただきました。当日はそれぞれの部会から発表があり、それについて質疑応答や意見交換がありました。まず第1部会からは7月に開催したセミナーの集客状況等の報告があり、その後は、セミナーのアーカイブを作成してはどうか、周知の際にはセミナーの内容だけでなく“受講者の声”を掲載してはどうか、などの意見がありました。第2部会からは、ビジネスコンテスト”GOLDRUSH”について報告があり、参加者数などの数値的なKPIは達成したけれど、“地域の課題を地域の事業者で解決する”という目的にはほど遠い内容であり、令和8年度については内容をブラッシュアップしていきたいとの話がありました。第3部会からは、”KIBITTE(キビット)”について登録事業者が100社から停滞しているという話があり、登録事業者の増加に向けて活動していくとともに、「地域内経済循環」という”KIBITTE(キビット)”の意義を事業者に伝えるために、事業者交流会を開催するとい

う報告がありました。第4部会からは、たがわPlannersの活動内容の報告があり、委員からは「たがわPlannersからインスタについて教えていただきたい」という意見が出ていました。

2日目には、田川市産業振興課（事務局）と田川市産業振興会議委員と意見交換を行いました。

[たがわPlanners]

Q. 高校の先生たちの参加状況、熱意はどうか。

A. たがわPlannersについて、学校に声をかけたところ十数名の学生が来てくれた。現在、たがわPlannersは中学生向けに勉強会を開催し、中学生に考え方を伝えるなどの取り組みを行っている。教育委員会がたがわPlannersを見学に来られた。会議を見た感想は「大人たちの会議よりもすごい。」とのことだった。ちなみに今は4代目部長。初代部長は、たがわPlannersでの活動を通して愛着を持ち、現在は教育実習で田川市に先生としてきている。高校生ならではの課題としては期間が3年間と限定されていること。どうやって事務内容や思いを引き継いでいくかという継続性が課題であった。そこで経営指針書を作った。

[KIBITTE]

Q. KIBITTEの退会理由は

A. 年会費1万2000円が回収できないこと。またそれに加えて、地域内経済循環という本事業の意義をこちら側が伝えきれていないこともあると思う。交流会を開催したのもその状況があったから。営業で足を運ぶと参加率は2割程度。過去500～600社は足を運んでいる。しかしながら更新のタイミングで1割は退会される状況。

Q. 一般社団法人田川地域経済活性化センターに予算はないのか。

A. ない。委員によっては会議謝礼をセンターに寄付している人もいる。部会でも5万円を割り振られているがほとんど使っていない。紙代などは商工会議所で負担。製本が必要な場合は田川市で負担してくれている。

(参考予算)

【収入】

KIBITTE 会員費：110 万

会議謝礼の寄付：50 万

ビジネスコンテスト協賛金：90 万

【支出】

KIBITTE 運営費：150 万

ビジネスコンテスト費用：90 万

第3部会経費：4万4千

※市役所は予算をとっていない

山田会長：ありがとうございました。今回の視察の目的は、1つは私たちが作成した4つのスローガンがありますが、田川市では、この4つの柱を具現化させてさらにそれを実践している。計画を立て、実行して、結果を確認していくPDCAができてこの会議はそのまま参考になれるのではないかとというのが、今回の視察の目的です。もう1つは、田川市ではたがわ地域経済活性化センターを一般社団法人化している。これがすごく特徴的でした。このKIBITTEは一般社団法人が運営されています。他、事務局からは感想等はどうでしょうか。

事務局（田中）：印象的だったのが、実務責任者会議で、それぞれ4つの部会から報告があったときに縦割りではなく、違う部会の方から意見が出たり、自分たちの部会の悩みを相談したりされているので、横の繋がりが強いというのは感じました。大東市でも様々な取り組みは実施していますが、ただその取り組みを、例えば、だいとう産業活性化協議会の事業について市民会議の場で報告があるのかといえ、そこはありませんでそこが違うのかなとは思いました。また市民会議の4つの基本指針をどう進めていくのかというのは、いろんなパターンがあると思いました。田川市のように一般社団法人を設立するというのが1つの方法ですし、色々な方法を事務局も考えないといけないと感じています。

事務局（椎葉）：田川市では実務責任者会議が月に1回、今回で90回も開催されています。4部会のそれぞれの活動に対して、他の部会からの意見であったりとか質問だったり、が本当に活発に議論されているということが、すごく印象に残りました。1つの部会だけではなかなか解決できないようなことが、お互いに共有することによって、様々な意見が出たり、課題を共有できたりされているという部分を見せていただき、印象に残っています。今後、大東市でも活かしていけたらと感じました。

事務局（林）：たがわPlannersでは、高校生であるにもかかわらず、取り組み自体もすごくしっかりされていますし、自分たちで考えて自分たちがどういうことをしようかということ、その方針を立てて実施しているところ凄いなと思いました。

-続いて、田川市に参加された委員よりコメントをもらう-

北尻委員：今我々が進めている4つの基本指針については、田川市で掲げられる要素と似ているところも多くあり、同じようなやり方で進めていけばいいのかなとも思いますが、やはり、大東市は大東市の地域的な特性もあつたりもしますので、よいところは真似をしながら、やはり、自分たちの地域に合わせたオリジナルなやり方で続けていきたいなと思いました。

内田委員：実は、田川市視察に参加した日は、熊本地震の日でした。また、地域的にいいですと、隣の宮若市に弊社の九州工場があります。今回、初めて田川市を訪れましたが、隣の市でも全く違うなと思いました。田川市では、昔、炭鉱を中心に栄えていたんだろうなという名残が残っています。そこをもう1回勝負しようではないですが、そういう思いを持って、活動されているのかなと感じました。具体的には、先ほど田中部長がお話されたことは、その通りだなというふうに思っています。大東市ではもうすでに、それを実行できるような基盤とか、すでに様々なことを、実施していますので、それをどう結びつけ

て、どういうふうに発信していくのが一番大切かなと思います。田川市の報告をさせてもらおうと、例えば、田川市の第 1 部会で商工会議所と連携し、中小企業庁から補助金を引っ張ってきて参加者が無料で参加できるセミナーを開催されていました。後は、たがわ Planners ですが、これは高校生がクラブ活動みたいなイメージで、色々な学校から、学生たちが毎年集まって、できている会です。そのとき思ったのが、大東市でも DAITO DOUKI CAMPUS を実施していますので、こういったイメージのものとしてやってみたらどうかと、思いました。他にも大東市では色々な基盤があるので、それをもっと発展させるようなことを考えていけば、いくらでもできることがあるのではないのでしょうか。

上田委員： 私が一番感じたのは KIBITTE を、実際に作り上げてそれを運用しているところまでいってるというのは、驚きました。困ってる市民のために、登録されている中小企業が連絡してきてくれたら駆けつけますといった、そういうプラットフォーム作り上げたことは凄いと感じました。また、運営を一般社団法人化するっていう部分も、よく考えて実施されているかなと思います。大東市でも公式 LINE で、告知や相談など、誰でも参加できて、情報がもらえる、困ったことを投げたら返ってくるいったレスポンスのあるプラットフォームを作っていきたいですね。そして、先ほどから話に出ていますたがわ Planners。高校生が 3 年間という期間が限定されている中で、運営していくうえで、一番大事なのは「何のためにこれをやってるのか」ところ。そういった指針を高校生たちがしっかり腹に落として、「私たちはこういうことのためにこれやっている」と考えているのは凄いなと思いました。大学生になるともうワンランク上のことができるのではないのでしょうか。そしてそれを大人が何も言わず、あえて何もしゃべらずに、生徒たちだけで運営しているところも凄いなと思いました。

山田会長： 第 1 部会でいいますと、「経営理念を成文化し、10 年ビジョンを作る」本当はそこまでしっかりとやっていきたいと役員メンバーは期待されていますがなかなかそこまでいかないということでした。経営者の中には経営理念なんかなくてもできるという方もいますが、やはりそれが大事だということを前面に押し出しているのもそのギャップがあるようです。第 2 部会では、ビジネスコンテストについて審査員が、地元の金融機関であり、審査の基準がビジネスになってしまったと。融資できるかどうかという視点になってしまったことを反省されました。第 3 部会では、地域の困りごとを集め、それを解決する地元の中小企業とマッチングさせるということをやっておられます。こちらはプラットホームという部分はしっかりとできていますが、今は参加事業者数が伸び悩んでおられるようです。第 4 部会については、竹中委員が実施されておられる部分もありますし、もうこれは是非とも、大東市でもこの活動はしていけないといけないと思いました。感想としましては、田川市で話を聞いて、これはなかなか追いつくのに時間かかるという印象は持ちませんでした。皆で議論して進めていけば実現できると思います。

本多委員： 若者にいかに地域に残ってもらうかというのは危機感を持っています。たがわ Planners の話で高校生が卒業してどんどん人が入れ替わるという話がありましたが、私も演劇の活動をやっておりますが、結局 10 年やってるのは私だけです。中のメンバーは皆が 10 年やってるわけではないです。毎回新鮮なのでそれはそれでいいんですが、逆に、ノウハウの蓄積がされなく、新しく入ってきたメンバーによって、やる気が変わるというのはあります。私も普段、劇団の方を見ている、いわゆる就職活動で「学生時代に力を入れたこと」を聞かれるので、それに答えられるようなことをしないといけないからする

といった判断をしてる若者もいますが、一方で、演劇の活動自体が楽しいかどうかとか、あとは仲間と繋がれるかどうかという判断基準も大きいので。たがわ Planners では、そういう場を提供してるということが素晴らしいことだと思います。

小谷委員：この一般社団法人化されていることで、収益事業ができるというのは、よく考えられているというのが実感です。ここは確かにちょっと難しく、取り組むのに少し力があるかなと思いますが、それ以外は、すぐに大東市でできるのではないかなというのが率直な感想です。特に第 1 部会でのセミナーについては都道府県で補助金があったと思いますので、利用できるのではないのでしょうか。

中村委員：他の方からも話に出てきていますが、既に大東市には素晴らしいコンテンツがあるのに、見せていないとか、共有できてないと感じます。どうしてもこういう話になると何か新しい事業を生み出さないといけないという感じになりますけど、今あるものを、どう見せるのかとか、今すでにあるものを組み合わせて作るということを議論できたらいいなと思います。例えば、前回にお話のありましたとおり、吉村さんがやられている事業について、まず身近な人のことですら知らない。このメンバーでは知っていても、他の一般の企業がどのぐらい知っているか。何かやってるのに繋がっていない、共有できていないというのがもったいないなと思います。

山田会長：確かに、こういう話になると、入口の戦略を考えてしまいます。東京の事例だったと思いますが、量販店のお酒のバイヤーさん。日頃は千円くらいの単価の商品が一番よく売れる。一方、東京にあるビストロのオーナーシェフ。そこで、量販店のワインの持ち込みはOKにしたわけです。お互いにどんなメリットがあるかという、量販店は日頃 1000 円 2000 円の商品しか売れないけども、東京のそういうお店を使うときといえば、絶対記念日です。そうすると 1 万円近い単価のワインが売れるわけです。一方、お店側は在庫を抱えるというリスクはなくなるというメリットがあり、お互い WinWin です。でも決してこの 2 社は、特別なことはやっていなくて、普段やってることをただやっただけです。

竹中委員：横の繋がりがあるということが、素晴らしいなと思いましたが、さらにこの田川市での例でいくと、例えばたがわ Planners は学生が主体であり、会議は横の繋がりがありますが、実際の活動でも横の繋がりができるところまで踏み込めば、学生もメインになりますし、大東市でできたら面白いなと思います。大東市の人口は約 12 万人ですが、学生の数でいいますと、大阪産業大学、四條畷学園、桐蔭高校などに公立を加えますと人口比 10%は超えるはずですよ。そこは強みにはなるのではないかと思います。

後藤委員：大学では人を育てるということをやっており、今までいろんなご意見が出てきたような仕組みなり経営なりを変えて、もちろん対応していきたいと思います。大阪産業大学の学生は地方出身の方が多く、それこそ地元に戻る学生は多いです。でもそこを「大東市って面白いな」と思ってとどまってもらえるような、そういう仕組みづくりもあってしかるべきだと思います。しかしながら、大東市がいいよと思ってもらえるような情報を学生自身知らない。それは大学の責任もあるかもしれません。

吉田委員：今先生がおっしゃったように地元に残さないといけない企業があるとか、魅力的な企業があ

るということを、まだまだ知らない市民の方が多いのではないかと思います。そこはもっと情報を発信して、こういうプラットフォームの構築が実現されたら活性化すると感じました。また、田川市では退会者が出るということでしたが、大東市ではこれだけ払っても、それ以上のリターンがあるということを理解してもらえば多分退会者はでないと思いますので、そのような仕組みができれば面白いなと思いました。

山田会長：総人口、市民が減らないためには、「働く場所があるかどうか」だと思います。要は吉田委員がおっしゃったような魅力がある企業です。それがすごく重要だと思います。

上田委員：プラットフォームについては、市民の人が KIBITTE をどれだけ見てるかということもあると思います。市民の人からすれば、もっと見たら得するような、例えば、クーポンがついているとか。企業は物を売りたい、サービスを使って欲しいという立場ですが、市民の人が見てなかったら意味がない。どちらが先かわからないんですよ。ただ、弊社のような、BtoC じゃなくて BtoB の会社ではあまりメリットがないとは感じます。BtoC の商売があるところは、年会費 1 万 2000 円のメリットはあるのではないかと。例えば、大東市にも水道を直せる会社、鍵を直せる会社はいっぱいあると思いますがネットで検索すると、大手企業がヒットし、びっくりするような金額がかかったりします。実は隣の鍵屋で直せば本当に安くやってくれることを知らないわけです。

山田会長：ありがとうございます。この 10 年後の大東市の基本指針。いよいよこれを具現化していったら、次はこれを本当に進めていかないとはいけません。

⑤大東市産業振興ビジョン（骨子）について -事務局（椎葉）より資料 7 に基づいて説明-

本多委員：企業誘致の話については、今までの議論の中ではなかったのではないかと思います。そのあたりをもう少しご説明いただけますか。

事務局（田中）：ビジョン（骨子）につきましては、産業経済室の職員で作っているものになりますが、その中で市の課題について議論をした中で出てきたということ、そして、事業所数が減少してきているというのは顕著に数字であらわれています。そこを逢坂市長が事業所、市内を活性化していくために空き地や空き店舗、そこに新たな企業を誘致してはどうかという話が出ているのが現状です。市民会議の 4 つの基本指針には企業誘致は入っておりませんでしたが、市で付け加えさせていただいたところなんです。

上田委員：地域で大きな土地が空くと、そこにマンションを建てたりとかされると、周りの工場はどんどん逃げていってしまいます。住工が共創できない環境になっているので、そこを市としてどう考えるのか。自分は経営者なので、会社を大きくしていきたいと思いますが、もし自分の家の隣に、工場などがあればしんどいなと思う気持ちもあります。

事務局（田中）：それを緩やかに区分しているのが、用途地域の設定です。ここは工業地、ここは住宅地ですとしています。行政としてどこまで縛れるか。後は、立地適正化計画っていうことで、設定はしておりますが、それも設定することで緩やかに誘導したいっていう趣旨のもので、どこまで縛りができるのかということは課題ですね。また、産業振興ビジョンの説明に付け加えさせていただきますと産業経済室としても、4つの提言の要素を組み込んで、これを実現していくことが市の方針であることをきちんと示すためにもビジョンが必要だと考えています。けっして4つの提言とは全く別のビジョンをつくるとかそういう意味ではありません。私たちも、市役所内の他部署、それから議会にもきちんと計画として位置付けてやっていきたいという思いで進めております。

本多委員：もう1つは実行していく組織が、やはり課題だと思います。このビジョンは、私たちが議論してきたことをどう目標づけしていくかという目線で整理していただいたんだろうと思いますが、その実行する組織、田川市の事例で出てきたような、地域経済活性化センターや実務者会などの実行部隊などをビジョンの中に位置付けることは検討されていますか。

事務局（田中）：ビジョンは、あくまで理念、方針という位置付けと考えており、その下に具体策をぶら下げていこうと考えています。ですので、体制をどうしていくのかというところは、これからの検討になるとかと思います。

山田会長：例えば10年ビジョンの話をしますと、皆で頑張って作ったとしても、明日になれば9年と365後の目標となります。目標というのは達成させないといけない。

小谷委員：すべてが網羅されており、このようなビジョンを用意されてるのが凄いです。細かい話になりますので、ビジョンではなくて、具体の施策を考えられるときに、検討していただいてもいいのかなと思います。人材確保のところで、それこそ、先ほどお話がありました卒業された学生に大東市にとどまっていた環境づくりという点で、企業の魅力発信という観点は入れ込まれてもいいのかなと思いました。学生が大企業に飛びつくという傾向はあるかとは思いますが、大東市にはこんな企業があるというPRができるような何かがあればいいなと。そもそも知られてないと、就職先の候補として挙がってきませんので。私は市役所に2年ほど、出向していた経験がありますが、その時に同じような課題がありまして、若い人に来てもらうためにオープンファクトリーを実施したりしました。また、「働きがいのある企業表彰」という、大阪府経営合理化協会が約10年実施されていることがありまして、それがあれば親御さんが安心するんですね。それで人材確保に繋がったという事例がありましたので、少しご紹介させていただきました。

山田会長：大東市の1つの魅力として、奨学金への補助金があります。ただし、もっと発信していかないとけない。制度をご存じない方も多いですよ。

事務局（田中）：産業振興ビジョンの、上位計画であります総合戦略の中の大きな1つに、情報発信を行

うということが挙げられています。産業経済室の色々な施策、色々な補助金制度についても、やはりご存じない方も多い。そこを強化しないといけないというのは、今年、産業経済室でも考えております。今年は事業案内の冊子を作り、職員が出かけるときはこれを持っていくような話をしています。

後藤委員：若者の心をとらえるような、発信が必要かなと思いますが、やはり最後は子どもが親の仕事を自慢できる、「うちのお父さんが仕事でこんなことをして、車ができて・・・」と話す子どもがいるかどうかだと思います。

山田会長：以前にキャリア教育で話した後、感想をもらいました。中学1年生の女子でしたが、毎日、お父さんお母さんから、「仕事に行くの嫌や」とか、「うっとうしい」とか、そういう言葉を聞いていました。でも山田さんの話を受けて仕事が楽しいなら、私は働きたいと思いましたということでした。それを読んで嬉しいなと思いましたし、「うちの会社は大丈夫かな」と思いました。おそらくその中学1年生の学生のご両親は大東市の中小企業で働いておられると思います。嫌だとか言わせているのは、会社です。会社でないのなら経営者だと思います。まずは自分たちからですよ。それを今、話を聞いて思いました。

□次回開催日

10月8日（木）15:00-17:30

大東市役所厚生棟A会議室